留学の最終レポート

縄文時代から鎌倉入城前にみる関東地方と武士の始まり

文芸学研究科　モノー・ソフィー
担当教員　堀　新 教授

はしがき

本論文は修士一年生の「縄文時代から源頼朝が鎌倉に到着する前までの間、関東地方と武士の始まりに関しての考え」というテーマについての論文の序論の翻訳である。この論文の課題は、インキュベーターとして関東地方の傾向がどのようにして武士の都として鎌倉の新しい政治制度を成立することを可能にするのかを明らかにすることである。

考え方を理解しやすいために、このレポートの構成は3部分に分割した。まずは、テーマを選んだきっかけについて話したい。次に、関東地方と源平合戦の興味深い点を説明したい。最後に、研究の方法を紹介したい。

1) テーマを選択したきっかけ

ピエール・ブルデュー が言ったように、はじめに武士は支配階級に支配された階層だった[1]。この文章は一般的な武士のイメージに対するかもしれないけれども、これは元の社会制度の真実である。論文の序論で自分の話について話すことは少し珍しいが、テーマを選択したきっかけを理解ためにそれは必要と思う。子供の頃から、父親とチャンバラという時代劇をよく見るので、私は侍に興味がある。

その時は、知らない遥かな国で主君への忠誠のために戦う人の心情が全然分からなかったけれども、興味深いと感じた。どうしてこの人々はそのように献身しているのかと考えた。その頃は、ヨーロッパの歴史の方が気になったので、深く調べませんでした。逆説的に、「どうして」

[1] SOUYRI, Pierre-François, *Les guerriers dans la rizière*「田にある兵」(筆者訳), 2021, p. 18

という子供らしいの質問が大人になった後で口に出た。その時に、ソルボンヌ大学の歴史の学士号を取得していた、東洋言語文化学院にまだ通っていなくても、侍と西洋の騎士の違いについてよく考えていた。侍のように、西洋の騎士は人々にとって献身的なイメージがあると思うが、ヨーロッパ中世の騎士の歴史を勉強すると、このイメージが崩れて、そのような偉人ではないと気付いた[2]。

それで、「侍の場合には、騎士のようにその献身的なイメージが違うのだろうか」、「映画が映すイメージは正しいのだろうか」、「誰のために死ぬほど戦うのか」、「「将軍」や「大名」といういつも尊敬語で話される人たちは一体誰なのだろうか」、「この人とただの侍の違いは何だろうか」、「どうやってこの社会制度が成立されたのか」と自問した。自分で調べて、「見せかけと虚偽:武士道の欺瞞」[3] という本のおかげで質問の半分に答えることができたけれども、一つが残ていた。それは、「どのようにしてこの社会制度が成立されたのだろうか」である。

取り敢えず、テーマを選んだきっかけをよく理解するために、他の話について話したい。日本人の友達が「なぜこのテーマについて研究しているのか」と質問する時、この話を語る。今回も映画に関する話だが、ただのチャンバラではなくて、「怪談」[4]という有名な映画で、特に「 耳なし芳一の物語」に焦点を当てたものである。

この著作は小林正樹(1916-1996)による映画で、ラフカディオ・ハーン[5](1850-1904)の同名の著作を原作としている。それは、その名の通り、日本の民間伝承に伝わる怪談話を収録したものである。耳なし芳一の物語はその中の一つに過ぎないが、私にとっては、子供の頃にチャンバラ映画に触れた時以上の強い魅力を感じさせる作品であった。この魅力は、私が先に述べた「具体的にどのようにしてこの社会制度が成立されたのか」という問いに答える鍵の一つとなった。

本作の物語は、盲目の若い琵琶法師であるが、毎晩平家の亡霊たちに、その没落の物語を語り聞かせる様子を描いている。芳一の姿が毎晩消えていくのを不安に思った他の僧侶たちは後をつけ、状況を知ると、彼の身体に経文を書き写して、亡霊の目から彼を隠そうと試みた。しかし、タイトルが示す通り、経文が書かれていなかった唯一の部分である耳を亡霊に引きちぎられた。これは物語の非常に短い要約に過ぎないが、私が最も印象に残ったのは、芳一が壇ノ

[2]TOUREILLE, Valérie, *Robert de Sarrebrück ou l'honneur d'un écorcheur*「ザールブリュックのロベール ～剥皮人の誇り～」*(v. 1400-v.1462)*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2014, 272 p.
[3] ANSART, Olivier, *Paraître et prétendre: l'Imposture du bushidô*「見せかけと虚偽:武士道の欺瞞」, Paris, Les Belles Lettres, collection Japon, 2020, p.184.
[4] 1964年公開の映画で、主演の一人に日本映画界の有名な俳優の仲代達矢(1932-2025)が出演している。
[5] 日本に帰化し、小泉八雲と名乗ったアイルランド出身の作家で、ヨーロッパに日本文学と文化の普及に貢献した人である。。

浦の戦いを語る場面を小林監督が映像化したシーンである。ここから、この壮大な海戦に対する関心、戦争全体とそこに関わる人物たちへの興味が始まったのである。

2) 関東地方と源平合戦の興味深い

壇ノ浦の戦いは、源平合戦の最終決戦であり、歴史的には平安時代の最後の戦争である。なお、これは源氏による新たな時代の到来を告げるものである。この戦争は数十年にわたる対立の結果であり、様々な文献に描かれているが、多くは神話的な側面も含んでいる。

源頼朝が伊豆の北条氏のもとに流された流刑から帰還し、鎌倉に拠点を置いて武力による攻勢を開始したことは、平氏の没落の始まりを示す転換期である。頼朝は源氏の先祖たちの系譜に連なることを示しつつ、鎌倉という地に定住した。この鎌倉は、後に源氏にとって非常に重要な場所となる。

本論文では、この戦争の背景や経緯をさらに詳しく論じるが、重要な結果の一つとして鎌倉幕府の成立が挙げられる。すなわち、初代将軍が政治的指導者かつ覇権者として登場したことを意味する。この意義は、将軍職が戦闘的な性格を持つ点にある。正式名称である「征夷大将軍」は文字通り「蝦夷（えみし）を征伐する最高司令官」を意味する。この時点で、武士階級はついに権力の座を握り、天皇と並び、あるいは時間の経過とともに政治的決定権の面で上位に立つこととなり、その地位は数世紀にわたって続いた。これが日本の武士の政治的機能の起源の一つであり、その後の社会的・文化的影響の出発点となる。

しかし、鎌倉幕府がどのように成立したかを考える前に、私たちは過去を振り返り、武士階級が社会を支配するに至った経緯とその背景を深く理解する必要がある。過去を振り返ることの意義は、関東地方という重要な地域の形成過程を観察し、頼朝の武士の都建設という計画が、彼の氏族が大敗北を喫したにもかかわらず、いかにして可能となったかを理解することである。そのためには、社会の組織化や構造の変動をできる限りさかのぼって観察することが最良の方法である。

縄文時代から関東地方に豊富に存在した天然資源は、多くの人々を惹きつけ、やがて関東武士団の原型となる集団が形成された。本論文は鎌倉の発展の序章として、頼朝の鎌倉到着までに焦点を当て、続く論文で鎌倉の都市組織についてより詳しく研究することとする。

ご覧のとおり、本論文の目的は日本列島の武士全体の歴史を網羅することではなく、特に関東地方の歴史を研究し、鎌倉幕府がどのように成立したのかを理解することである。現在、日本で最も人口が多い地域である関東は、日本の中央政府が置かれる地域でもあり、まさ

にイル・ド・フランスのように「首都圏」としての役割を果たしている。しかし、イル・ド・フランスがほぼ一貫して王権の中心地であったのに対し、関東は長期間にわたり権力の集中が見られず、源頼朝の登場後も同様であった。

実際、それ以前の権力の中心は関西地方にあり、何世紀、あるいは千年以上にわたって続いていた。ここで疑問が生じる。関東が関西の権力を凌駕することができたのは偶然なのか。関西は地域資源や交易ネットワークを基盤にしてその地位を築いたが、関東にはどのような利点があり、なぜ戦略的に重要な地域として関西を凌いだのか。

これらの問いに答えるために、まず鎌倉とその歴史を振り返り、その重要性を理解する必要がある。鎌倉という地名が初めて登場するのは奈良時代の天平7年（735年）であり、当時は相模国（現在の神奈川県にほぼ相当）に位置していた[6]。

一般に、京都を除くと、平泉[7]のような例外を除き、大規模な都市はほとんど存在しなかった。

その意味で、鎌倉は中世における都市の発展の先駆けとなり、その後全国的に都市の繁栄が見られるようになった。また、鎌倉は単なる一都市ではなく、「国家や国、あるいは一定の地域の中心都市であり、政府や中央行政の所在地」であった、すなわち幕府の本拠地であった。鎌倉の歴史は非常に特異な歴史的背景の中に位置しており、その成立の意義を理解するために重要であるが、これについては後に詳しく論じる。

本論文では、縄文時代から頼朝が鎌倉に到着するまでの鎌倉の発展についても取り扱う。そのため「インキュベーター」という表現は偶然選ばれたものではない。ここでいうインキュベーターとは、新たなインフラ形成のための肥沃な環境を指す。

関東が鎌倉の発展にとっていかに肥沃な環境であったかを説明することが課題である。

ただし、鎌倉が中央権力に対して完全に自立した最初の武士都市ではなく、源氏の武士政権成立以前に平泉という都市が存在していたことも留意すべきである[8]。

3) 研究の方法

---

[6] IWAO Seiichi, IYANAGA Teizō, ISHII Susumu, YOSHIDA Shōichirō, FUJIMURA Jun'ichirō, FUJIMURA Michio, YOSHIKAWA Itsuji, AKIYAMA Terukazu, IYANAGA Shōkichi, MATSUBARA Hideichi, “102. Kamakura”, dans *Dictionnaire historique du Japon*「日本の歴史辞典」, volume 11, 1985. Lettre K (1) pp. 64-65;

[7] **11世紀末から19世紀末にかけて重要な都市の一つであり、藤原氏の分家によって創設され、源頼朝の弟である源義経が幾度も滞在したことで知られている。**

[8] IWAO Seiichi, IYANAGA Teizō, ISHII Susumu, YOSHIDA Shōichirō, FUJIMURA Jun'ichirō, FUJIMURA Michio, YOSHIKAWA Itsuji, AKIYAMA Terukazu, IYANAGA Shōkichi, MATSUBARA Hideichi, 232. Hiraizumi. In: Dictionnaire historique du Japon, volume 8, 1982. Lettre H (2) p. 7;

次に、方法論と資料について述べる。歴史学は、私の考えでは、長い間、文献資料の研究に限定されてきたが、今日では考古学的、さらには地理学的・社会学的な視点を欠いては客観性を保つことができないまでに発展している。したがって、本研究では、文献資料と物質資料の両面からの検討を試み、可能な限り研究の精度を高めることを目指す。

本テーマはフランス語圏ではあまり扱われておらず、ロラン・ネスポルス、フランシーヌ・エレール、ジャン＝フランソワ・スイリといった一般的な著作を除けば、専門的な資料のほとんどは日本語で提供されている。鎌倉および源氏に関して直接的に扱ったフランス語資料としては、ルネ・シフェールによる『保元物語』『平治物語』『平家物語』の三部作の翻訳があるが、そこには一定のバイアスが存在し、それを踏まえた上で利用する必要がある。

一方、発掘調査報告書は本質的に偏りが少なく、鎌倉市や関東各県が発注しているもので、事実に基づいた報告書が多い。しかし、日本の武士について論じる際に多くの歴史家が陥りがちな誤解を避けるために、「侍」と「武士」という二つの概念を簡潔に説明しておく必要がある。前述したように侍を「戦士」として言及したが、ここでは「職業的戦士」と「階級としての戦士」という概念の違いを明確にしておく。

前者は職務であり、後者は社会的地位である。「侍」という言葉は、「侍う（さぶらう）」という動詞に由来し、「貴族に仕える、護衛する」という意味である。この語は文字通り、貴族の護衛に付随する武装した護衛を指していた。これに対して「武士（ぶし）」は特別な身分を持ち、「士（し）」は勇敢な戦士であることを示し、「武（ぶ）」は中国語の「武（ウ）」から借用された漢字である。「武士」という語は、7世紀の『続日本紀』に初めて登場し、平安時代初期に多用された「兵（つわもの）」に代わるものであった。したがって、本論文で扱うのは武士階級と、その組織についてであり、源頼朝が鎌倉に到着し、武士の社会支配が始まるまでを対象とする。

本研究は、まず関東地方において先史時代から人々がどのように集団を形成してきたかを理解することに重点を置く。縄文時代に自然資源と自給自足に適した環境に惹かれて最初の人々が到来し、定住化が進み、最終的に社会的な階層構造の萌芽が見られるまでの過程を辿る。その後、関東地方出身の諸武士団の研究を通じて、将来の武士都市の政治的発展に寄与した前段階の構造がどのように形成されたかを探る。次に、経済的発展により地域が重要な拠点となった過程を検証し、最後に平氏の地域での変遷を観察する。最終的には、源氏に焦点を当て、彼らの関東地方への進出、権力構築、そして没落と復興の初期段階を考察する。

つまり

このレポートは、私の歴史学一年生の研究論文において扱う具体的なテーマを示すものである。本論文は、日本の武士文化に対する長年の関心と深い考察の結果である。この研究のテーマは非常に広くて、また魅力的であるため、研究を進める上で著しく頑張った。今後の課題として、平泉と鎌倉という二つの歴史的都市の成立過程を比較検討し、鎌倉が平泉の構造を鏡像的に模倣して形成された可能性について考察を深めたいと考えている。

参考文献

- IWAO Seiichi, IYANAGA Teizō, ISHII Susumu, YOSHIDA Shōichirō, FUJIMURA Jun'ichirō, FUJIMURA Michio, YOSHIKAWA Itsuji, AKIYAMA Terukazu, IYANAGA Shōkichi, MATSUBARA Hideichi, Dictionnaire historique du Japon「日本の歴史辞典」(筆者訳), Maison franco-japonaise, 1963-2000
- ANSART, Olivier, *Paraître et prétendre: l'Imposture du bushidô*「見せかけと虚偽:武士道の欺瞞」(筆者訳), Paris, Les Belles Lettres, collection Japon, 2020, 184p.
- TOUREILLE, Valérie, *Robert de Sarrebrück ou l'honneur d'un écorcheur*「ザールブリュックのロベール ～剥皮人の誇り～」*(v. 1400-v.1462)* (筆者訳), Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2014, 272p.
- SOUYRI, Pierre-François, *Les guerriers dans la rizière*「田にある兵」(筆者訳), Flamarion, 2021, 393p.